

# 東晋から宋への禅譲について

大久保秀造

東晋宋禅譲は南北朝時代、南朝の始まりを告げる出来事である。それを実行した人物が劉裕であり、彼は禅譲の形を持って事を為しているが、禅譲の完成形である漢魏禅譲の形と比べると相違点がある。今回はそこに着目し彼の禅譲について簡単に流れを掴み、その点について考えてみる。彼は京口の寒門出身<sup>1)</sup>、江蘇彭城の人、哀帝の興寧元年(363)の生まれという。安帝の隆安3年(399)11月、会稽で五斗米道の宗教指導者であった孫恩なる人物が反乱、鎮圧に従軍<sup>2)</sup>。元興元年(402)桓玄が建康に入り、その軍団に組み込まれる。同2年(403)桓玄「楚王」となり、12月安帝より帝位を篡奪。翌3年(404)2月、劉裕はかつての同僚らと共に決起、5月桓玄を倒す<sup>3)</sup>。義熙元年(405)3月、安帝が建康に復歸、東晋復興。同5～6年(409～410)劉裕、北伐し南燕を滅ぼす。劉裕留守の際を突き、勢力を回復した五斗米道の反徒が魯循(孫恩の娘婿)をリーダーとして建康に迫り、留守居の諸将が破られるも劉裕帰還し撃破。同7年(411)4月、魯循を討滅。同8年(412)9月劉毅討伐軍を起す。10月江陵陥落、劉毅一党を誅殺。土断を実施<sup>4)</sup>。同9年(413)7月蜀(四川地方)を鎮定。同10年(414)2月首都に帰還し反目した諸葛長民とその与党を誅殺。

同12年(416)後秦国の英主姚興の死を受けて北伐開始、10月洛陽を奪還し帝陵を復旧する。これまでの功績を踏まえ九錫を授け宋公となす旨の詔が布告されるが受けず大都督となる。同13年(417)3月洛陽に入り、8月長安陥落させ後秦国を滅ぼす。10月政務の一切を取り仕切っていた腹心の劉穆之死去を受け建康へ戻る<sup>5)</sup>。同14年(418)6月相国・宋公・九錫を受ける。12月安帝崩じ恭帝即位す。元熙元年(419)王位に爵を進める。7月受諾。同2年(420)6月恭帝より禅位を受け皇帝になる、永初と改元。ここまでが劉裕による禅譲の流れである。叛徒制圧、東晋復興、南燕・後秦攻略、土断の実施と功績を積み重ねて禅譲の下地を作っている。東晋復興から皇帝即位まで15年という歳月がかかっていることは、東晋内

部における地位固めが順調とはいかなかったことを示していると考えられる。それは彼が寒門出身であることが東晋政治中枢に力を持つ貴族勢力の協力を取り付けづらかった証左であろう。

この禅譲と漢魏禅譲とを比較してみると幾つかの相違点がみられる。まず『1人で禅譲の過程を成し遂げていること』である。漢魏禅譲は曹操・曹丕の親子2代で、魏晋禅譲でも司馬氏3代で実行されてきた。それに比べれば劉裕は一代で禅譲過程を成し遂げている。これは貴族出身者であった前の2氏とは考え方が異なり、実力者が政権を担うことの実を優先した新たな試みであったと考えられよう。貴族の思考回路では実力以外にも儀礼的舞台を経て交代劇を成さなければ篡奪者の誹りを受ける、それは忌避したいとするが、劉裕は貴族でないのでそう考えなかったのである。これは『権力者としての昇進の間隔の短さ』という点でも同じであるとする。もっとも大きな違いは『禅譲をした先帝の殺害』であろう。漢の献帝は山陽公として、魏の元帝は陳留王として余生を送り天寿を全うしているが、恭帝は禅譲した翌年の永初2年9月に殺されている<sup>6)</sup>。これ以後天寿を全うできる禅譲した皇帝は少なく、それどころか皇帝が代替わりする度に粛清が行われている。特に劉宋から南齊にかけては先代が亡くなり次代が後継すると、先代の血縁者が誅滅されるという悲劇が繰り返される。禅譲した皇帝が年長で有能であれば尚更その傾向は強まっている。権力を狙う他の誰かに利用されないためにも必要な措置であったのであろう。さらに『功績の偏り』という点である。劉裕の功績は先に述べたように主に晋室復興、南燕討伐、後秦討滅、宗教反乱の鎮定と武力面に頼っているところが大きい。内政面における功績は義熙土断がその最たるものである。それは彼が寒門で政治を牛耳っていた門閥貴族の積極的支援が得づらかったことを先に理由として挙げた。権力掌握のために同僚の武将を粛清し自身に逆らう者を排除してきた。その代表は劉毅や諸葛長民であるが、彼らは劉裕とは違い貴族と親しくしていた。軍事面では実力者でありながら政治面

では力を発揮できなかったことに彼が武人皇帝であるという評価を与える要因となっているが、それは政治の実権を担っていた貴族層の賛同を得にくかったからである。

東晋宋禪讓について流れをおさえ、漢魏との違いをみてきた。漢魏との違いは幾つかあるが、特に注目すべきは先帝殺害ということであろう。理由は述べた通りだがそれだけ政情不安を抱えた政権であることの表れである。一つ間違えば桓玄と同じ篡奪者として討伐されかねない。事実禪讓前に劉裕が反目する者を肅清している際に北側に亡命した皇族らによって北側勢力が南下を招きそうになっている<sup>7)</sup>。これは武人が政権をとることの難しさを示している。ただこれ以後武人を中心とする寒門と貴族の通婚などで政権は安定していく。

### 註

- 1) 寒門とは華北から流亡し江南に居住した貧しい家門のことである。貴族の対義語として用いられる。
- 2) 五斗米道は道教の一派、広く民衆に布教され貴族にも信者がいた。
- 3) 『宋書』によれば劉裕と共に桓玄討伐に立ち上がったのは劉毅・諸葛長民（共に北来の貴族出身）ら北府所属の中堅將校である。
- 4) 土断とは戸籍改革のこと、東晋では華北から江南に逃れてきた人々に本籍とは別の仮戸籍（避難先の戸籍）を与えていたが、そのために戸籍が曖昧となり税収に不利益が生じた。こうした事態を解決するために仮戸籍を本籍とさせ、戸籍数を確定し税収の安定に努めた。東晋では6度実施された。
- 5) 川合安氏の「劉裕の革命と南朝貴族制」（2003、『東北大学東洋史論集』第9輯）によれば『宋書』王弘伝に、劉裕が九錫を求めたことを聞いた劉穆之はこれを恥じて悶死したという。
- 6) 『晋書』恭帝紀
- 7) 『晋書』載記姚興伝

\*他に以下の文献を使用した。

岡崎文夫『魏晋南北朝通史 内編』（1989、平凡社東洋文庫）

越智重明『魏晋南朝の人と社会』（1985、研文出版）

川勝義雄『魏晋南北朝』（2003、講談社学術文庫）

川本芳明『中国の歴史5 中華の拡大と崩壊 魏晋南北朝』（2005、講談社）

（大学院文学研究科博士後期課程史学専攻）